

粛清されたベトナム語作家を巡る評価の変遷と連続性 (1930s–2020s)

——自力文団カイ・フンを事例に——

田 中 あ き *

Changes and Continuities in the Evaluation of a Purged Vietnamese Writer (1930s–2020s): A Case Study of Khái Hưng of the Self-Reliant Literary Group

TANAKA Aki*

Abstract

This article examines domestic and international critiques of the literature of the Vietnamese-language writer Khái Hưng, who was active from the French colonial period to the eve of the Indochina War. It then explores changes and continuities in Vietnamese literary criticism in light of changes in the nation's cultural policies.

Khái Hưng was one of seven members and the most prolific writer of the Self-Reliant Literary Group, founded in 1933 in Hanoi. In 1941 he was arrested by the French for anticolonial activities. Following World War II, he supported the Vietnamese Nationalist Party as an editor of the Party's newspapers. In 1946 he was captured by the Communist-led Việt Minh, and in 1947 he was executed. On the grounds that he was involved in the Party against the Việt Minh and was purged by the Việt Minh, few serious studies have been conducted on Khái Hưng despite his stature as a leading writer in the 1930s and 1940s. Although former South Vietnamese scholars recognized the importance of Khái Hưng's late works, they had to start by collecting these materials, which had been scattered due to national division and war; also, South Vietnamese students of literature tended to prefer the study of foreign literature to domestic literature. After the fall of the former South Vietnam, those who fled abroad as refugees had to start earning a living from scratch. Therefore, few of them studied literature at academic institutions, and little serious research was conducted on Khái Hưng, including his activities in the latter years of his life. However, as Đỗ Lai Thúy points out, avoiding such "sensitive issues" in Vietnam makes it difficult to truly understand the country.

* 東京外国語大学大学院総合国際学研究科 博士後期課程；Doctoral Programs, Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan
e-mail: akimbo_tnk@yahoo.co.jp
DOI: 10.20495/tak.60.2_210

This paper carefully traces the treatment of the literature created by Khái Hưng, who was recognized as a “sensitive issue.” At the same time, it attempts to dismantle the formula that was constructed with the rise of social realism: romanticism=bourgeoisie=decadence=reaction, which has become a simplified and somewhat established theory in Vietnamese literary history since Khái Hưng’s death. Focusing on a specific writer reveals the complex ways in which the cultural policies of a war-torn nation were operationalized at the civilian level.

Keywords: Khái Hưng, Self-Reliant Literary Group, Vietnamese literature, colonial literature, purge

キーワード：カイ・フン、自力文団、ベトナム語文学、植民地文学、粛清

I はじめに

1930–40年代にベトナム・ハノイで活躍した文学グループ自力文団（Tự lực văn đoàn）の中核メンバー、カイ・フン（Khái Hưng/本名：チャン・カイン・ズー Trần Khánh Giur, 1896–1947）は、反動派とみなされ1947年にベトミン（Việt Minh：ベトナム独立同盟）によって粛清された。こうした経歴から、仏植民地期の文学界を牽引する作家であったにもかかわらず、ベトナム共産党のプロパガンダ機関である宣教班（Ban tuyên giáo）の指導のもと、カイ・フンを扱った本格的な研究はこれまでほとんどされてきていない。しかし、ドー・ライ・トゥイ（Đỗ Lai Thúy, 1948–）が指摘するように、こうした「デリケートな問題」を忌避しては、ベトナムという国を最短距離で理解することは困難となるだろう [Đỗ Lai Thúy 2016: 7]。

本稿は仏領期からインドシナ戦争前夜にかけて活躍した、ベトナム語作家カイ・フンの文学に対するベトナム国内外の批評・評価を整理し、国の文化政策の変遷を踏まえながら、ベトナム文芸批評の変化を考察する。¹⁾ ベトミンに抹殺されたことで「デリケートな問題」と認識されるに至った人物が創作した文学がどのように扱われてきたのかを丁寧に追うと同時に、カイ・フンの死後、現体制下のベトナム文学史において単純化され、なかば定説となりつつある「カイ・フン（自力文団の小説執筆者）＝ロマン主義小説＝ブルジョワジー＝頹廢」といった1930年代後半におけるチュオン・トゥー（Trương Tửu, 1913–99）の評価からいくぶん影響を受けていると考えられる公式、さらに政治活動突入後に付け加えられた「＝反動」といった公式の解体を試みる。なお、国レベルの文化政策の変遷については、今井昭夫「ドイモイ下のベトナムにおける包括的文化政策の形成と展開」に詳述されており [今井 2002]、本稿はカイ・フンという具体的文筆家に焦点を当てた民間レベルでの文化政策適用の実態を窺い知ろうとするものである。

1) カイ・フン並びに自力文団の文学の概要は、川口 [1987]、竹内 [1966]、Durand and Nguyen Tran Huan [1985]、Hoang Ngoc Thanh [1991] 等を参照いただきたい。

II カイ・フン

カイ・フンは幼少時に漢字と国語^{クオックグー}を学んだが、1913年よりベトナム人第一期生として、コレージュ・ポール・バール（Collège Paul Bert, のちのリセ・アルベール・サロー（Lycée Albert Sarraut））へ入学し、文学部でラテン語やギリシャ語を学んだ。1933年、ニャット・リン（Nhật Linh/ 本名：グエン・トゥオン・タム Nguyễn Tường Tam, 1906–63）が自力文団を結成し、カイ・フンは多くの文学作品を執筆した。1938年、自力文団は植民地からの独立を目指す政治闘争へと方針を転換し、その後ニャット・リンが大越民政党（Đại Việt Dân Chính Đảng）を立ち上げた。日仏共同支配期の1941年10月、カイ・フンは「親日派」の嫌疑でフランス当局に捕えられ拷問を受け、監獄に2年間収監された。1945年3月、日本によるフランス植民地機構の解体の後、八月革命以後もカイ・フンはベトナム国民党（Việt Nam Quốc dân đảng）の機関紙『正義（Chính Nghĩa）』（1946.5–1946.12）に短編を掲載し続けた。1946年12月19日、インドシナ戦争が勃発し、カイ・フンは家族とともにナムディン省（Tỉnh Nam Định）へ疎開したが、1946年末、ベトミンに捕らえられ、1947年テト（旧正月）の頃に殺害された。²⁾

カイ・フンの父親は省知事で、配偶者も省知事の娘であり、出版社の機能を果たしたカイ・フンの自宅には印刷機が買い備えられた。このような外的要因により、カイ・フンはブルジョワジーとみなされたと考えられるが、自力文団のメンバー、トゥー・モー（Tú Mỡ, 1900–76）によれば、カイ・フンは無産者知識人であり [Phương Ngân 2000: 396]、フランス社会党 (SFIO) メンバーを支持していた [Khái Hưng 1939: 4]。また、カイ・フンは大越民政党のメンバーを務めたことで、反共＝反動との烙印を押されているが、実際、ベトミンと手を組むことも模索しており [Nguyễn Tường Bách 1981: 42]、ベトミンに連行される数カ月前には、共産党のプロパガンダを担当したチャン・ファイ・リウ（Trần Huy Liệu, 1901–69）から、自身の身を守る道具でもあるベトナム国民連合（Liên hiệp Quốc dân Việt Nam）の徽章をもらっている [Trần Khánh Triệu 1997: 20]。なお、晩年の作品では、「親が国民党の黨員だからといって、子はベトミンであってはならないのか」と作中人物に発言させており [Khái Hưng 1946: 8]、党派を超えた思想を有する人物であったと言える。

ちなみに、2012年8月にベトナム全国の18–30才の男女500人を対象に行われたアンケートによれば、自力文団のメンバーであるスアン・ジウ（Xuân Diệu, 1916–85）およびテー・ルー（Thế Lữ, 1907–89）が携わった「新しい詩（Thơ Mới）」の認知度が93%であるのに対し、自力文団と「新しい詩」の双方を知るものは18%と非常に低くなっている。またニャット・リンの認知度は15%、カイ・フンは14%で、スアン・ジウの86%、テー・ルーの42%と比べ、非常

2) カイ・フンのより詳しい略歴は、田中 [2022] を参照いただきたい。

に低い認知度となっている [Trần Hữu Tá 2013: 479–481]。このように自力文団の小説家と詩人とは、その認知度および評価が大きく異なってくる。

以下、カイ・フンに焦点を当ててその評価の有り様を時代と地域ごとに見ていくが、本稿で用いる社会主義ベトナムとは、1945年八月革命以後のベトナム民主共和国および1976年南北統一後のベトナム社会主義共和国のことを指す。社会主義ベトナムにおいては、上記のように自力文団の詩人と小説家の扱い方が異なるため、以下社会主義ベトナムの項目で表記する自力文団とは、主に小説家を名指したものとなる。また、各書籍名の後に記した年度は出版年であり、新聞掲載年ではない。なお、ベトナム国家図書館のデータをもとにした考察を行っているものの、元データの打ち込みに誤りが多々生じていることを確認しており、本稿で用いたこれらデータの精緻さに関してはすべてが正確ではない可能性があること、そして、本稿はカイ・フンに関する言及すべてを網羅したものではないことをここで断らせていただく。³⁾

III カイ・フン文学に対する評価（1930s–2020s）

1. 仏領期ベトナム（1930年代–45年）

カイ・フンの文学に対する初期の批評を考察するにあたり、押さえておかなければならないこととして、チュオン・トゥーの眼差しの変化とその功罪がある。チュオン・トゥーは、自力文団創設から2年後に、『トー・タム (Tổ tâm)』(1925)の作者ソン・アン (Song An/ 本名: ホアン・ゴック・ファック Hoàng Ngọc Phách, 1896–1973) と、ニャット・リンおよびカイ・フンを比較して、ソン・アンは心理学者、カイ・フンは思想家、ニャット・リンは改革家であるとの分析を行っている [Trương Tửu 1935: 3]。とりわけ筆者が研究対象としているカイ・フンの後期作品、即ち政治活動突入以後の文学活動を見てみても、カイ・フンが豊かな思想の持ち主であることは明確であり、この時期におけるチュオン・トゥーのカイ・フン文学に対する慧眼力を見逃すことはできまい。なお、自力文団論において、概してカイ・フンとニャット・リンとの同一視がみられる一方で、チュオン・トゥーが二人の違いをしかと把握している点は注目に値する。その後、マルクス主義を熱心に学んだチュオン・トゥーは、1932–37年における「自力」文士グループについて、「文学において、彼らは放埒の毒を運びた一連のロマン主義小説を世に送り出し、罪深く無秩序でモラルなき個人主義を吹聴した。社会において、社会闘争から逃避する〈夢と幻〉に浸りきり、身体から心魂に至るまで墮落した青少年の群れの形成に関与した。文壇において、彼らは分裂・派閥の見本となり、無礼なまでの自負心と、品

3) 補足資料としては、『カイ・フン小説の論考 (Bàn về tiểu thuyết của Khải Hưng)』[Ngô Văn Thư 2006] や、論考「ベトナムロマン主義文学評価における問題と文学研究思考の刷新 (Vấn đề đánh giá văn học lãng mạn Việt Nam và sự đổi mới tư duy nghiên cứu văn học)」[Lê Thị Dục Tú 1997: 216–235] が挙げられる。

格の乏しい狭隘さで、実学ある者たちからは愚鈍と非難され、熱意ある者たちからは邪道とけなされた。狡知・ご都合主義・日和見主義……は、自力文団の属性となった」との批評を行っている⁴⁾ [Trương Từ 2013: 788]。その後の社会主義ベトナムの文学史において、自力文団には、ロマン主義小説、個人主義、墮落、頹廢といった代名詞がつきまとうことになったが、その始まりは、1930年代後半から1940年代前半のチュオン・トゥーの見解に帰すものと考えられる。⁵⁾

1939年、文学評論家チュオン・チン (Trương Chính, 1916–2004) は、カイ・フンは文学を格式から性質に至るまでのすべてを刷新し、文学に玄妙かつウィットに富んだ新たな芸術をもたらしたと讃え、彼は純然たる芸術家であり、文学を社会改造のための魔術とはみなしていないため、自身の筆を用いて理想を崇めること等はしないと分析している [Trương Chính 1939: 35–36, 47–48]。

1943年、共産党の理論家チュオン・チン (Trương Chính, 長征, 1907–88: 上記チュオン・チンと区別するため以下「長征」と記す) の草稿による『ベトナム文化綱領 (Đề cương về Văn hóa Việt Nam)』が出され、その目的として、日・仏の文化政策がもたらす脅威からベトナム文化を守るために、孔子、孟子、デカルト、ベルクソン、カント、ニーチェ等のヨーロッパおよびアジア哲学の誤った観念を打消し、唯物弁証法、唯物史観を勝利に導く学術・思想における闘争、さらには古典主義、ロマン主義、自然主義、象徴主義等に抗い、社会主義リアリズムの傾向を勝利に導く文芸各派における闘争が挙げられた [Đề cương về Văn hóa Việt Nam 2004: 20]。なお、カイ・フンは、戯曲『文学談義 (Câu chuyện văn chương)』(1946)で、『ベトナム文化綱領』が掲げた三原則に疑問を呈している。⁶⁾ 同じく1943年、サイゴンでは、カイ・フンの歴史小説『蕭山壯士 (Tiêu sơn tráng sĩ)』(1940)が、価値ある文学作品10選に選出されている [Nguyễn Trác and Đái Xuân Ninh 1989: 131]。なお、これ以降、カイ・フン文学の評価の

4) この批評のタイトルは、「ここ10年間のベトナム文学 (1930–1940) (Tính số mười năm văn học Việt Nam (1930–1940))」であるが、執筆年や掲載書籍名が不記載であるため、いつ頃にかかれたものかは明確ではない。しかし、タイトルからは1940–41年頃と推測できる。なお、チュオン・トゥーは、『今日 (Ngày Nay)』, No. 90, 1937/12/19で、カイ・フンやニャット・リンの作品 (『蝶魂仙夢 (Hồn bướm mơ tiên)』, 『冷酷 (Lạnh lùng)』, 『嵐の人生 (Đời mưa gió)』) を燃やせと言うだけでなく、グエン・ビン・キエム (Nguyễn Bình Khiêm, 1491–1585) やグエン・ズー (Nguyễn Du, 1765?–1820), グエン・コン・チュー (Nguyễn Công Trứ, 1778–1858) までも燃やせと訴えたことが報告されている。チュオン・トゥーが自力文団を執拗に攻撃したのは、当時、自力文団の作家たちの文才に敵う者は誰一人いなかった [Trương Từ 2013: 1152], という妬みによるものだったと考えられる。

5) なお、ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903–50) は、「共産党のパンフレットやチラシなどの印刷物において、知的自由に対する攻撃は、通常『小ブルジョア (プチブル) 的個人主義』とか『一九世紀流リベラリズムの幻想』などという語句を連ねた弁論ですっぱり覆われる。そしてこの弁論は『ロマンチック』とか『センチメンタル』という罵言で補強されるのだが、ただこうした語は一致した意味をもっていないから、反論するのは容易ではない。このようにして論争は真の問題から巧みに逸らされるのである」と述べ、『現実逃避』『個人主義』『ロマン主義』に反対するという形での非難はただ弁論術上の仕掛けに過ぎないのであり、その真の目的は歴史の歪曲をまっとうなことと思わせることである」との見解を示している [オーウェル 2021: 97–98]。

6) 筆者による和訳: https://drive.google.com/file/d/10ZE7q87Kf_8kow5Y5_uF0UOEIummER1D/view (最終アクセス: 2022/11/29)

変遷および継続を、具体的作品を通してより明確に捉えられるよう、特にこの『蕭山壯士』の批評に注目していく。

1945年、ヴー・ゴック・ファン（Vũ Ngọc Phan, 1902–87）の叢書『現代作家（*Nhà văn hiện đại*）』が出版された。叢書の四巻上・下が小説家に割かれているが、四巻上の巻頭項目「風俗小説（*Tiểu thuyết Phong tục*）」の筆頭にカイ・フンが置かれていることから、カイ・フンは当時の小説家のトップに位置づけられていたことが分かる [Đỗ Lai Thúy 2016: 112]。また、カイ・フン論における風俗小説について、外国人や後世の人々にとって、老練の筆で書かれた風俗小説は、いつの時代も価値を有し受け継がれていくものであると評されている [Vũ Ngọc Phan 2010: 666]。ところが、分断後の北ベトナムおよび統一後のベトナムにおいては、この叢書自体、ヴー・ゴック・ファンの死後、つまりドイモイ以後の1989年まで再版されぬままに終わっている [Phong Lê 2010: 218]。⁷⁾

2. 北ベトナム（ベトナム民主共和国）／ベトナム社会主義共和国（1945–76年）

1945年3月からの日本の単独支配に続き、日本の敗戦、そしてベトナム独立宣言と、独立闘争が高揚するにつれて文学は時代遅れとされ、政治・社会・経済等の理論本やイデオロギー本が主流となっていった [Vũ Ngọc Phan 1945: 15]。ベトナム国家図書館での検索結果を見ると、1946–50年の間、カイ・フンの作品は刊行されていないが、対仏戦争中のハノイにおいて1951年に『蝶魂仙夢（*Hồn bướm mơ tiên*）』および『蕭山壯士』の2冊が再版されている。南北分断直前の1953年には『継承（*Thừa Tự*）』が再版され、同年の『執筆技術（*Nghệ thuật viết văn*）』では、カイ・フンの短編「あなた生きて（*Anh phải sống*）」（1934）を用いて、文章の書き方が教示されている [Phạm Việt Tuyền 1953]。

1954年の南北分断以後、1956–58年のハノイでは、^{ニャンヴァン ザイファム}「人文・佳品（*Nhân văn - Giai phẩm*）」事件に対する弾圧だけでなく、自力文団を潰す動きも存在し、結果、北部において自力文団の作品は30年に亘って完全にその姿が消されることになったとされる [Đỗ Lai Thúy 2016: 107 脚注2]。ちなみに、「人文・佳品」事件とは、1956年に作家や知識人の一部が『人文』紙や『佳品』誌に論陣をはり、スターリン批判や「百花斉放」に依拠しながら、文芸政策をはじめとする党・政府の政策を公然と批判したものの、1958年7月初めに、寄稿者に対して文芸各組織からの除名、執行委員解任等の処分がとられた事件のことで、『人文』の観点は「ブルジョア個人主義」と断定された。かつて自力文団を痛烈に批判したチュオン・トゥーは、抗仏戦争中からの作家と党指導部との衝突について具体例を挙げながら、「このように大衆を侮蔑し、団結を破壊し、独断専権をほしきままにし、上にへつらい下を排斥するような人物が長い間ずっと文芸を指導

7) サイゴンでは、1960年に再版されている。

し、上級からよろしいとほめられ、表彰すらされているのである。文芸界の空気がいかに息苦しいものかは言わずとも分かるだろう」と述べ、文芸界の沈滞状況は文芸担当幹部の上級に対する個人崇拜に起因した官僚主義的指導によってもたらされたものであるとした。こうした言動により、チュオン・トゥーは作家協会から除名され、ハノイ師範大学からも追放された〔栗原 1988: 3, 7, 17; *Trương Tửu* 1956: 3–14〕。

1957年2月、^{チュオン・チン}長征は「人文」事件を批判しながら、ロマン主義文学の潮流をひとまとめに抹殺してはならず、時代時代の進歩の流れを分析すべきであるとの見解を示している。墮落した個人主義の悲観的で軟弱な傾向、あるいは日・仏のファシズム下における反動傾向に対し率直な批評を行い、妥協を許さぬ闘争を進め、西欧の頹廢したブルジョア芸術の模倣に抗う一方で、かつてのロマン主義作品における愛国・進歩の要素を吟味する必要があると述べている〔*Trương Chính* 1997: 306–307〕。^{チュオン・チン}チュオン・チンによれば、^{チュオン・チン}長征が言及したロマン主義文学とは明らかに自力文団を指しており〔*Mai Hương* 2000: 40〕、^{チュオン・チン}長征の主張には、共産党の理論家として「人文」事件を批判する体を見せつつも、自力文団の文学を革命的ロマン主義として肯定的に批評していかうとする姿勢が垣間見える。⁸⁾

上記^{チュオン・チン}長征の呼びかけを受けてか、「人文」事件の只中、同年1957年6月に、ファン・ク・デ（*Phan Cự Đệ*, 1933–2007）は、『蕭山壯士』再版にあたっての批評を新聞に掲載している。進歩的文学の任務とは、帝国主義および封建主義を断罪し、革命精神を喚起・養成し、民衆の果てなき可能性、革命の最終的勝利への信頼を鼓舞することにあるが、こうしたなか、カイ・フンはいかなる目的を持ってこの作品を創作したのかと疑問が呈され、過去の作品の評価であったにしても、批評家として、無産階級の観点・労働者階級の進歩的観点・マルクス主義の観点や歴史観を捨て去るわけではないことが主張されている。著者は、『蕭山壯士』の題材となった^{タイソン}西山の乱⁹⁾を、民族の歴史にかつてなかった偉大な農民蜂起とみなし、『蕭山壯士』は農民決起蜂起を誹謗中傷したと非難している。また、失敗し現実逃避するさすらいの英雄を持ち上げたカイ・フンの過去を遡っていけばいくほど、彼の頹廢のかつ保守的な思想が明らかになってくるとし、カイ・フンは、『蝶魂仙夢』において青年を仏教と恋愛の眠りに誘い込み、1936年には、何万人もの労働者・農民が党旗のもと闘争に立ち上がった人民戦線の高揚のなかで、労働者ヴォイ（*Vội*）を中傷する『^{トロン・マイ}チョン・マイ岩（*Trống Mái*）¹⁰⁾』を刊行し、反動の影

8) 革命的ロマン主義は、「社会主義リアリズム」をいっそう豊かにし発展させる、正当に必要な要素であると定義される〔中里見 2003: 102〕。

9) 18世紀末に起きた^{タイソン}西山阮氏と^{クワンナム}広南阮氏との争い。

10) タイトルの和訳は、川口〔1987: 177〕に従った。

響がより根深く露骨な『蕭山壯士』が生まれたとの批評を残している [Phan Cự Đệ 1957: 3]。同じく 1957 年、チュオン・チンはカイ・フンについて、非常に豊かな想像力の持ち主であり、自力文団のメンバーのなかで最もロマン主義派の作家であると述べている。チュオン・チンによれば、ここでのロマン主義とは、現実からより遠く離れ外の現実に注意を払わないという意味で、そのため、特に初期作品はすべて「小説的」でありでっち上げであるとの説明が加えられるが、一方で、カイ・フンはロマン主義派であるものの、彼の小説はリアリズムを保ち、彼が創り上げる人物はみな生き生きとしており、ただ物語中の多くのエピソードがでっち上げであるとの補足がなされている。そして、カイ・フンの人物を創造する技術は、外部の形式よりも人物の内部の意義・振る舞い・変化に注目し、彼は行動を起こす様々に異なる動機、時には矛盾する動機を鮮やかに描き分け、読者にその矛盾を明示すると解説し、彼は注意深い観察者であり、人間の心理を深く理解していると評価している [Mai Hương 2000: 375–379]。

その翌年の 1958 年、『文史地 (Văn Sử Địa)』に、ニャット・リンとカイ・フンの人生観と世界観はほぼ同一であるとの見解のもと、二人の共通点を並べた批評が掲載された。なかでもイデオロギーに関する論述に注目すると、自力文団は当時のブルジョアイデオロギーを代表する文芸グループであり、フランスの頹廢的ブルジョア文学の影響を強く受けているとの見解が示された上で、いずれにせよ自力文団も、進歩的側面を有し、批判的リアリズムおよび小説の形成においてそれなりの貢献をしており、今必要なのは、彼らの価値を全否定するのではなく、また彼らを称賛しすぎるのでもなく、適切に評価すべきことであるとの意見が述べられた。そして、ニャット・リンとカイ・フンの小説がもたらした顕著な害悪は、大勢の青年を道楽の道へと陥れ、ほとんどすべての青年知識人と学生を民族闘争の現実から逃避させ、贅沢な放蕩生活への渴望に駆り立てたことであり、それは、当時のフランス植民地当局の意図とぴたりと符合し、彼らの作品における後退の傾向が、若者たちの勇敢さを麻痺させる毒となったと主張された。一方、カイ・フン個人に対する言及を見てみると、その著書『清徳 (Thanh Đức)¹¹⁾』(1943) (サイゴンでの再版時に『不安 (Băn khoăn)』へタイトルを変更) について、作品内における作家の態度は、完全に客観的な立場にあるとされ、ブルジョアの文人カイ・フンは、当然のことながら、社会をまんべんなく見通す力が不足しているが、ブルジョア社会の現実的問題において、彼らを正しく評価するために、このような分析を行う必要があるとした [Nguyễn Đức Dân 1958: 8–22]。こうした論調には、社会主義ベトナムにおける社会主義リアリズムの確立期 (1954 年以降) において、その方針に則った批判を加えつつ、カイ・フン文学を正当に評価しようとする動きが存在したことを窺うことができる。なお、1961 年刊の『ベトナム文学 1930–1945 年 (Văn học Việt Nam 1930–1945)』について、チュオン・チンは、自力文団の各メン

11) これについては田中 [2021] を参照いただきたい。

バーを論じた章は、明らかに右派の論であり、執筆者たちは革命以前の自身の考えや想いをいまだ忘れ去ることができていないため、表面では批判していても内面では称賛しているとのコメントを残している¹²⁾ [Trương Chính 1979: 58]。

ベトナム国家図書館のデータに基づけば、1964年にハノイで、カイ・フン著『同病 (Đồng Bệnh)』およびニャット・リンとの共著『嵐の人生 (Đời mưa gió)』の2冊が再版されていたことが分かるが、『同病』に関しては、その出版社が既に存在しない自力文団が運営した「ドイナイ社 (Nhà xuất bản Đời nay)」であることから、データの打ち間違えであると思われる。

ベトナム戦争の激化、そして世界的なベトナム反戦運動の高まりを背景に、1971年に出されたヴー・ドゥック・フック (Vũ Đức Phúc, 1921–2015) 著『現代ベトナム文学史における思想闘争 (1930–1945) (Bàn về những cuộc đấu tranh tư tưởng trong lịch sử văn học Việt Nam hiện đại (1930–1945))』では、「反動かつ頹廢文学理論の傾向」という項目が設けられ、冒頭では『正義』に掲載されたカイ・フンの短編が狙上に上げられた。ここから北ベトナムにおいて、当時のベトナム国民党の機関紙が、この時代まで保管されていたことが推察できるが、カイ・フンは『文学談義』で(共産)党の文学路線を露骨に攻撃したといったように、いくつかの作品を取り上げて痛烈な批判がなされている。と同時に、「(筆者注: ベトミン傘下の) 文化救国会に参加したカイ・フンが、トー・ヒュー (Tố Hữu, 1920–2002) とグエン・ディン・ティ (Nguyễn Đình Thi, 1924–2003) と握手する姿を見て、喜びで涙を流す同志もあり、こうしてみなが自身の君子ぶりを示す挙動は、双方にとってのいくぶんかの誇りとして認められよう」と書かれた新聞記事について、¹³⁾ 革命を破壊するようなカイ・フンが「君子」とは何事かと攻撃がなされている [Vũ Đức Phúc 1971: 152–155, 168]。こうした様子からは、カイ・フンが、党派を超えた信奉を集めていたことを垣間見ることができる。なお、2013年にはフォン・レ (Phong Lê, 1938–) によって、上記評価を見直すコメントが論文の脚注でなされた [Trần Hữu Tá 2013: 30]。

1972年刊『ベトナム作家略伝 (Lược truyện các tác gia Việt nam tập II)¹⁴⁾』においては、『時集 (Thời tập)』(1974)の記述によれば、カイ・フンに関する文章18行のうち7行が反動等の政治活動に割かれた。ここには、1947年にナムディン省スアンチュオン郡クアガー (Nam Định, huyện Xuân Trường, Cự Đà) でカイ・フンが死去したことが記載され、ハノイで刊行された書籍はすべて共産党と国家の管理のもとにあり、上記の詳細はハノイ政権の確認の上での情報と受け取ることができるとの見解が示されている [Thời tập 1974: 33–34]。

なお、ドー・ライ・トゥイは、「人文」事件以後のマルクス主義社会学批評では、特に「新

12) 確かに、バック・ナン・ティ (Bách Năng Thi) によるカイ・フンの解説は、唯心論や階級に結びつけて批判しようと努めはするものの、結論では、創作の練習を進める者にとって、カイ・フンの文学から多くの事柄を学ぶことができるとしている [Mai Hương 2000: 353–374]。

13) *Tiên phong*, No. 22. (発行日は未確認)

14) Trần Văn Giáp, ed. 1972. *Lược truyện các tác gia Việt nam tập II*. Hà Nội: NXB Khoa học xã hội.

しい詩」や自力文団の小説等の過去の文学現象に対して、より階級分析に重きが置かれるようになり、1945年以前の文学は、無産階級の革命文学とプチブル下層階級の批判的リアリズム文学、およびプチブル上層とブルジョア階級のロマン主義文学とに分類され、「新しい詩」の潮流やニャット・リンやカイ・フンのような自力文団の優れた作家たちは「喪われる」ことになったとの見解を示している [Trần Hải Yến 2009: 66-67]。

3. 南ベトナム（ベトナム国家／ベトナム共和国）（1949-75年）

1949年のコーチシナへのバオ・ダイ＝ベトナム国編入から1954年の南北ベトナム分断を経て、1955年にベトナム共和国が建国された。本節では、いわゆる「南ベトナム」における、カイ・フン評価の様相を考察していく。

1958年の『カイ・フンについての論考 (Khảo luận về Khải Hưng)』では、カイ・フンの作品が何度も再版が重ねられている一方で、カイ・フンという作家自体に言及されることがない状況を憂慮し、カイ・フンが忘却されてしまうことを危惧して筆を執ったとの説明がなされ、カイ・フンの最期について、トゥー・ガイ (Tú Gầy) の資料をもとに、ベトミンに捕らえられ軟禁されている間、ホー・チ・ミン (Hồ Chí Minh, 1890-1969) を讀める詩を詠まされたが、その内容に揶揄を含意していたことから殺害されたと記されている [Lê Hữu Mục 1958: 5, 8-9]。なお、これについては、他の人も同じように言及している [Nguyễn Vũ 1969: 125; *Phổ thông* 1959]。また、同じく1958年、バカロレア試験の対策本として『カイ・フンについての論題 (Luyện đề về Khải Hưng)』が出されている。

1960年には、文学グループ創造 (Sáng Tạo) が文芸誌創刊にあたっての所信表明ともとれる「戦前 (1945年以前) におけるベトナム文芸の見直し」をテーマに掲げた討論の場を設け、主に自力文団の文学が痛烈に批判された。カイ・フンの名前は直接出てこないものの、戦前の文学とはほぼ自力文団を指していることが分かる。討論では、戦前文学が今後古典となっていく可能性は「否」とされ、それらの文学は読者を思考に沈ませることなく、彼らが生きた時代を研究する社会学者の参考資料にはなり得ても、そして南ベトナムの国語教科書に採用されとしても、人生観を後の世代に遺していくような、時間を超越する文学にはなり得ないとの見解が示されている [Duy Thanh *et al.* 1960: 1-16]。(笑) の記述が散見する嘲笑を交えながらの討論からは、戦前文学が植民地主義の抑圧、厳しい言論統制のもとでの文筆活動であったこと、即ち書けるテーマに制限があったとの認識が欠如しており、まるで戦前という言葉が示すように、戦前＝戦争のない時代といった、ある種安穏とした時代の文学と捉えているかのような印象を受ける。しかし、文芸誌を新たに発行するにあたり、創造グループには、戦前文学の影響はもはや受けていないのだとの決然とした宣言の必要があり、古きものを徹底的に打破しなければ、新しい文学は描けないといった意識に基づいた必要不可欠の「否定の儀式」としての討

論会と捉えられよう。一方で同年1960年、トゥー・モーの娘婿によって『自力文団 (Tự lực văn đoàn)』が出版され、自力文団の特に小説家に焦点が当てられた内容が組まれている [Doãn Quốc Sỹ 1960]。なお、1961年の『ベトナム文学簡約史新編 III (Việt Nam văn học sử giản ước tân biên tập III)』では、「ニャット・リンを読むと、私たちは常に、己れの魂だけを映し出し、己れの不安だけを物語り、己れの夢だけを追い求めているように感じる。カイ・フンはニャット・リンとは異なり、人間の物語を一つ一つ拾い上げる作家であり、様々な様相を呈した生に向けられたガラスの鏡、彼の周りを取り囲む社会全体的心情と形状を、忠実にかつ優しく受け容れる鏡なのである」と [Phạm Thế Ngũ n.d.: 479]、二人の違いが具体的に示されている。

1963年にニャット・リンは自死を遂げる。生前カイ・フンと最も親しかったニャット・リンが、カイ・フンが亡くなった状況を究明しようとしめない態度に訝る者もいるなかで [Nguyễn Vỹ 1969: 125]、本来先頭になってカイ・フンの追悼本等を編集すべきとみられていたニャット・リンが世を去ったことで、¹⁵⁾ 自力文団のメンバー以外の人間たちの手でカイ・フンの特集がようやく組まれていくことになる。1964年のカイ・フンを特集した雑誌では、『正義』等に掲載されたカイ・フンの晩年の作品群についても、戦乱と南北分断によって、保管もままならずいまや散り散りとなった、カイ・フン後期の新聞掲載小説を蒐集し出版することは、カイ・フンの親族・友人の義務だけでなく、教育省の義務でもあると捉えられ、これらを出版することは、揺るぎない価値を備えたベトナム文学の宝庫の維持につながり、さらには、故郷を心から愛しベトナムの将来に奮い立つ、真の革命家の高潔な意識醸成への途上にある、若者世代の心の育成につながるであろうと評されている。また、上記を評した文芸誌編集者トゥー・チュン (Thư Trung/ 本名: Trần Phong Giao, 1932–2005) は、さらに前出のヴァー・ゴック・ファンの『現代作家』に言及し、大部分はヴァー氏が呈示した、理想小説→風俗小説→社会テーマ小説→心理小説という、カイ・フン小説の進展の流れに賛同するとしながらも、この評論は1942年編集のため、¹⁶⁾ これには続けて心理小説→革命闘争小説 [1945–46年執筆作品に依拠] への展開が付け足されるべきであるとし、1945–46年に執筆されたカイ・フンの作品を蒐集し本にすることは、1917年からのファム・クイン (Phạm Quỳnh, 1892–1945) の執筆記事をまとめて本にするよりも、文学界および学術界にとって有益であると述べている [Thư Trung 1964: 13, 16]。上記評価にロマン主義の文字が見当たらない点、¹⁷⁾ また現行体制のもとでは革命とは共産主義革命のみを示すのが常識となっている一方、カイ・フンの後期作品を重要視し革命闘争小説と見ている

15) ただし、ニャット・リンも、『文化—今日 (Văn hóa Ngày Nay)』(1958–59)にカイ・フンの短編を数編掲載している。

16) トゥー・チュンは1942年の編集と記しているが、カイ・フンについて述べられた第四巻(上)は1945年に発行されている。

17) 脚注5で記したように、西欧における文学潮流としての「ロマン主義」と、共産圏諸国の文学における「ロマン主義」とは異なるものである。

点で、社会主義ベトナムでの評価とは大きく異なる。なお筆者は、上記意思を継ぐべくカイ・フン後期における新聞掲載小説の研究を進めているが、1966年にはトゥー・チュンの呼びかけに応じて短編集『呪詛 (Lời Nguyền)』が、ベトナム国民党の関係者によって編まれている。¹⁸⁾

1967年には、1937年以後プロパガンダ色の濃い作品が多く出される一方で、カイ・フンは党派間の争いから抜け出たいかのように、純文学者の役割を維持したとの指摘がなされ [Thanh Lăng 1967: 744]、上述のカイ・フンの革命闘争小説とは、プロパガンダとは別ものであることがここから推測できる。同年1967年の『19世紀、20世紀前半のベトナム文学 1800–1945 (Văn học Việt Nam thế kỷ XIX tiền bán thế kỷ XX 1800–1945)』では、1905–45年の新聞史の項目において、雑誌『インドシナ (Đông Dương)』および雑誌『南風 (Nam Phong)』と並んで自力文団が論じられ、うち最も頁が割かれているのが自力文団で、『南風』の3倍の頁が費やされている。また、自力文団は風刺・諧謔・批判・揶揄の精神が度を過ぎていたため誤解を与えやすく、ひとにコンプレックスを植え付けるという欠点が記されている [Vũ Hân 1967: 139–140]。

1972年、カイ・フンに特化した『カイ・フンの生涯および作品 (Khái Hưng - thân thế và tác phẩm)』で、ズオン・ギェム・マウ (Duong Nghiễm Mậu, 1936–2016) は、カイ・フン文学と革命の関係性について、「(カイ・フンは) 文学者の道を歩んだ。過酷な歴史における熾烈な状況の下にもかかわらず、彼は心折れることなく、退くことなく、対立へと歩みを進めた。カイ・フンは私たちに、ひとつの肯定を示し残していった。文芸は決して政治と妥協することはない。文芸はただ革命と道を同じくするだけである。文芸はただ革命と道をともにする。文芸は断じて政治や統治に賛同しない。なぜなら、文芸は決して一つの場所に落ち着くことがなく、政治や統治が現状に満足する一方で、文芸はさらなる美を求め、より良きものを求めるからである」 [Duong Nghiễm Mậu et al. 1972: 52] との见解を示している。同年1972年、『カイ・フン短編集 (Truyện ngắn Khái Hưng)』が出され、冒頭にはカイ・フンの親族による、最も正確かつ充実したカイ・フンの略歴が記されている [Truyện ngắn Khái Hưng 1972]。なお、1973年の『文学辞典 (Văn học từ điển)』によると、1959年10月発行の雑誌『普通 (Phổ thông)』には、¹⁹⁾ ナムディン省クアガー河岸でカイ・フンが銃殺され、遺体は川に流されたことが記されていた [Thanh Tùng 1973: 116]。

1974年、テー・フォン (Thế Phong, 1932?36?–) は、ニャット・リンは英雄の精神を養い時代をつくるが、カイ・フンは時流によって自身を変化させると二人の相違を描写し、カイ・フンを批評する前に、自由と独立が失われた植民地体制のもと思想統制が敷かれたなかで、創

18) トゥー・チュンやカイ・フンの家族から、何度も要請・催促を受けての編集・出版であったとのことであるが、収められていない作品が存在すること、またパラテキストが消去されていること等、完全版ではない。よって、『呪詛』内の短編の研究を進める上で当時の新聞を探し出し、原文を確認する必要が生まれてくる。

19) 正しい書誌情報は、*Phổ thông*, No. 19, 1959/9/15.

作の自由が困難であった当時の創作環境を考慮する必要がある、執筆者と批評家の立場には相違があることを指摘している。なお、ベトナム文学史前半期の文学の盛り上がりのなかで、カイ・フンは、いかに小説を書くかを知り得た最初の人間との見解が示されている [Thế Phong 1974: 31-47]。同年1974年の『時集』では、カイ・フンの特集が組まれ、カイ・フンの死についていくつかの証言が挙げられている。

4. サイゴン陥落後ベトナム～統一後ベトナム (1975-86年)

1975年4月30日のサイゴン陥落により、サイゴンの街はホー・チ・ミンの名を冠する街となった。グエン・ヒエン・レ (Nguyễn Hiến Lê, 1912-84) の回想記によれば、1975年、ホーチミン市文化情報省は検閲実施のため、各出版社に在庫書籍を提出させ、何十もの反動・頽廃作家リスト、および何百もの発禁作品リストを作成し、リスト外の書籍のみを流通可能とした。一方、個人宅の所蔵書籍について、文化情報省は、各区の青年たちに各家々に所蔵されている反動・頽廃本を点検させ、持ち帰り焚書を実施する指示を出し、内容にかかわらず小説はすべて没収された。かなりの数の本が燃やされたが、区の文化情報省トップの部屋には、各種頽廃本・チャンバラ本が積み重ねられ、数年後に高額で売却されたとのことである。1978年に第二弾が実行され、自然科学以外の書籍をすべて破棄する反動・頽廃・時代遅れの「三毀」の指示が出された。各家々は、事典や数学・物理といった数冊のみを保持することができ、また、フランス共産党の『ユマニテ (Humanité)』も国内では販売禁止になったとのことである [Nguyễn Hiến Lê 2015]。

なお、1983年刊行の『文学辞典：第I集 (Từ điển văn học: tập I)』では、『蕭山壯士』の作中人物たちは、誤った歴史認識と消極的な人生観を体現したと評された [Từ điển văn học: tập I 1983: 345]。ドイモイ前夜の1986年8月、フォン・レは、1971年の文章「反動かつ頽廃文学理論の傾向」に記されたカイ・フンへの攻撃を大方参照したことが明らかに分かる論考を記し、ニャット・リンとカイ・フンは著名な作家ではあるが、反動的政治思想と卑劣な言動によって、彼らの文学の事績は灰燼と化したと述べている [Phong Lê 1986: 38]。

5. ドイモイ後ベトナム (1987年-現在)

本節は、とりわけカイ・フンの評価に影響を与えてきた文化政策および研究動向に顧慮して、評価の変遷の背景を窺っていく。改革開放政策であるドイモイ後、1987-89年にかけて「ハノイの春」と呼ばれるほど文芸活動は活況を呈したが [今井 2002: 93]、その大きな要因として、1987年に催された文芸家や文化活動家との親交会における、当時の書記長グエン・ヴァン・リン (Nguyễn Văn Linh, 1915-98) の発言が挙げられよう。²⁰⁾ グエン・ヴァン・リンはまず、文

20) *Nhân Dân*, No. 12147. 1987/10/14.

芸家たちが最も恐れていることは、同志たちがなんらかの世論によって、正しい立場で書いていない、党の路線・方針に反している等と断罪されることであり、自分にはその恐怖が身に染みてよく分かる共感を示した。そして、旧制度の悪癖やら多くの残滓を抱えて転入してきた旧制度（筆者注：旧南ベトナム）の人々とともに、現在の社会主義建設過渡期において、どのように物事を受け止めていくべきかを判断することは非常に難しく、多くの場合、正と誤の境界は不明瞭であるとの見解を示した。政権が誕生し社会主義建設に取り組み始めた時には、常に「脚色（tô hồng：紅に塗るの意）」が一方向的に称賛される傾向にあり、「脚色」された文章は周囲から認められやすく、悪者や悪事を描く者がいれば、たいてい「冒瀆（bôi đen：黒で塗りつぶすの意）」との悪評を買うことになったとの説明を加え、良人や良事を表現するだけでなく、皆がそれを嫌悪することによって、悪事を回避していけるよう、悪人や悪事を取り上げて描いていかなければならないと自身の考えを示した。さらに、多くの人間が社会主義リアリズム派と自称するものの、彼らは新しい人間の建設に向けた事実を描こうとせず、批判しようとせず、悪を訴えることをしないと指摘し、真なる芸術家である同志たちは、筆への忠誠心を維持し、自身の清き思考を保持していかなければならないと訴えた。その訴えは、同志たちは魂の技師であり、²¹⁾ 今なお多くの欠陥さらには多くの悪を抱える古き人間から、新しき人間を建設するために寄与していかなければならず、唯心・主意主義に陥って、聖人のような常に完璧な人間を描いてはならず、弱点が明らかにならなければ、新しい人間を建設していくことはできないと続く [Nguyễn Văn Linh 2011: 217–221]。翌月に出された決議では、これまでの共産党・国家による文化の指導・管理において民主主義を欠いていた点が短所として挙げられ [今井 2002: 93]、その指摘に連動するように、これまで長い間不在であった自力文団への言及が見られるようになっていく。

1988年にカイ・フンの『春半ば（*Nửa chừng xuân*）』が再版され、ハー・ミン・ドゥック（Hà Minh Đức, 1935–）がその序文を記し、カイ・フンの各作品への批評が記された。『蝶魂仙夢』や『春半ば』といった初期作品は、理想的恋愛のロマン主義的性質をかなり帯びており、『蝶魂仙夢』の作中人物たちは、仏陀の慈悲の御姿のもと愛情という夢幻のなかに生きている。『春半ば』は封建的道德に強く逆らい、結婚の自由を擁護した。『蕭山壮士』は、西山党に立ち向かう黎昭宗（^{レ・チウ・トン}Lê Chiêu Tông, 1506–27）陣営の青年たちを讃え、正義と非義とが綯い交ぜになり、誤った目的を信奉し追い求めているにもかかわらず、作者は彼らを理想を抱く壮士たちのように描いた。『チョン・マイ岩』では、海辺に避暑休暇にやって来たハノイのブルジョア少女が、強健な青年漁民ヴォイの美に魅了され、結果的にヴォイが恋愛の犠牲となる悲惨な結末を導く物語を捏造することによって、労働者を笑いの種へと陥れた。『家庭（*Gia đình*）』では、ブル

21) スターリンが作家を形容して述べた「魂の技師」に依拠するものと考えられる。

ジョア改良主義の立場を露呈させ、貧しい農村の社会改革および生活改善事業における搾取階級の役割を讃美した。後期になるにつれ、カイ・フンの小説は日増しに閉塞感が露呈していき、病的性質を帯びた芸術へと傾斜していった。『美 (Đẹp)』でカイ・フンは、放埒な芸術家のライフスタイルや、「芸術の為の芸術」の姿勢を讃えた。『清徳』に至ると、カイ・フンの小説の筆先は、一部の青年たちの病的な生におけるモラルなき思想を隠すことなく露わにした。恋愛の詩的なロマンチックさはもはや消失せ、実存主義的生活や、赤裸々な享樂的生活が描かれた。カイ・フンの政治活動と芸術創作活動とは複雑であり、政治活動およびその思想における過ちが、彼の創作の道を左右し顕著な影響を及ぼしているとされ [Khái Hưng 1988: 7-8]、こうした批評のパターンは、『文史地』(1958)の論調にまで遡り、現在に至るまでその作用を及ぼし続けていると言えるだろう。

1989年5月には、ハー・ミン・ドゥックが教鞭をとったハノイ総合大学において「自力文団シンポジウム」が開催され、自力文団と活動を共にし、その後、文化に関わる国家機関で重役を担ってきたフイ・カン (Huy Cận, 1919-2005) が言葉を寄せている。フイ・カンは、自力文団、そしてカイ・フン、ニャット・リンの最も批判すべき点は、その末路であるが、その視座でもって彼らの評価を過ってはならないとし、当初、彼らは真の愛国者であった、しかし誤った道を選択したことで、最終的に反動者となってしまったと振り返り、結びとして自力文団は小説における芸術性および近代性に大きく貢献し、クリアな文体を用いて非常にベトナム的な民族の口語および文語に寄与したと評している [Phan Cự Đệ 1999: 306-307]。同じく1989年5月、ホーチミン市で『自力文団について (Về Tự lực văn đoàn)』が刊行された。旧南ベトナムの土地で出されたこの本では、カイ・フンの項目に40頁が費やされ、政治的観点について、カイ・フンは自力文団の共通思想である改良の思想を有したが、ニャット・リンのように意識的に政治問題に言及することは稀であったと記されている。また、植民地主義のもと無産階級による革命文学が潰され厳禁とされるなか、『蕭山壯士』は国や人民の苦境を考える契機となり、現行の統治制度や《フランス》に対する憎悪を喚起したとされ、「私たちは今も砂に混じり入った金の粒子を貴ぶ、金の粒は少なく、砂はガンジス川の砂の数ほど限らないことを知っているけれども」と評価される一方で、巻末では、突如としてハー・チ・ミンの名が登場し、(共産主義) 革命文学のスタイルの起源は、ホー主席の『革命の道 (Đường cách mệnh)』(1927)であり、「分かりやすく覚えやすく簡略であること。(中略) $2 \times 2 = 4$ のように素早く簡便、かつ美化や粉飾なしに (中略) 同胞たちが読了後に考え、考えた後に目覚め、覚醒後には立ち上がり互いに団結し合って革命を進めていけるような文体でなければならない」との引用がされている²²⁾

22) 『革命の道』では、読者に対し、「我らの友は誰か？我らの敵は誰か？」との問いかけがされ、「この本は、簡潔に、分かり易く、覚えやすいように書いていく。おそらくブツ切れの文章だとけなす人間も出てくるかもしれない。然り！ここでは、言おうとする事柄を、非常に素早く簡便に、 $2 \times 2 = 4$ のように確実で、まったくの飾り気なしで述べていく」と記されている [Đảng Cộng sản Việt Nam 2002: 18]。

[Nguyễn Trác and Đái Xuân Ninh 1989: 141–142, 190]。こうした記述には国家の方針に符合させようとする後付け感が漂っている。その2カ月後の1989年7月、チュオン・チンは、1932–40年までの8年間に亘り、自力文団は（筆者注：地下活動ではなく）公開文壇において絶対的優位を占めてきたとし、彼らの本や新聞は最も美しく、最も良く売れ、都市のブルジョアおよびプチブル知識人の間で一定の影響力を保持していたと顧みて、その文学はあまりに多くの者が模倣したため、後にはステレオタイプの文学になってしまったと述べている。なお、自力文団は1932–40年の期間しか活動しておらず、1940年以前においては彼らは無実とされ、これまで共産革命の作家たちと自力文団の作家たちとを対比して、彼らの弱点を暴露してきた結果として、非常に長きに亘り、自力文団の作品は、高校・大学の生徒・学生たちに、墮落した反動派の文学と固く信じられ、さらには禁書とみなされてきたとの解説を加え [Mai Hương 2000: 30–41]、これまでの自力文団批評の動向と背景を振り返った。²³⁾

さらに1989年には、その大半が自力文団の小説で編まれた『ベトナムロマン主義小説 (Văn xuôi lãng mạn Việt Nam)』(全8巻)が出され、1994年まで何度も再版が重ねられた²⁴⁾ [Đỗ Lai Thúy 2016: 305 脚注1]。こうして自力文団の文学作品の再版・再評価が一気に見られるようになってきたものの、1989年秋からの東欧革命を背景に、国家の方針に転換が図られた。当時の書記長ドー・ムイ (Đỗ Mười, 1917–2018) は、1989年10月28日の第4回ベトナム作家大会において、²⁵⁾「創作の自由、批評の自由、討論の自由の奨励、文学の多様性の奨励は、多元主義に則して各流派が対立し合い、党および社会主義国家に逆らう動きへと誘導していくことではない。民主の拡大も局限なきものではない。我々の民主は、民主社会主義である。民主には指導が必要であり、民主の拡大を基底に民主的方法を用いて指導は行われる。自由・渾沌の蔓延を何もせずに傍観してはならぬ。とするレーニンの言葉と共に進みつつ、創作の自由を尊重し奨励するが、その過程は策定済みの計画に沿って指導されなければならない」と発言し [Đỗ Mười 2007: 850–851]、ベトナム共産党は再び思想の引き締めに向かった。

こうしたなか、1989年7月20日の日付が記された序文を取めた、ファン・ク・デの『自力文団——人物と文学 (Tự lực văn đoàn - con người và văn chương)』が1990年に刊行された。ここでは、『蕭山壯士』について、『皇黎一統志 (Hoàng Lê nhất thống chí)²⁶⁾』および『梳鏡新妝 (Sơ kình tân trang)²⁷⁾』に依拠して執筆され、また中国の『三国志』や『水滸伝』の空気が漂うこと

23) ここでは、1940年以後のカイ・フンの文学活動は無視されており、筆者が注目する1940年以後、つまり上記見解からすれば有罪部分のカイ・フン文学を研究する人がなかなか出てこないのも納得できよう。

24) カイ・フンの小説5編と短編1編が採録されている。

25) 作家大会は、1989年10月28日から11月1日まで開催された。

26) 『安南一統志』あるいは『黎季外史』としても知られ、呉家文派によって1804年に出された漢字で書かれたベトナムの歴史小説。

27) 19世紀初頭、^{ファン・クイ}範泰 (Phạm Thái, 1777–1813) による^{チューノム}字喃の詩集。

に加え、アレクサンドル・デュマの『三銃士』の影響も受けており、カイ・フンは東西の影響を結合させてベトナム流《英雄義士》を創りあげたとの解説がされている。なお、当書籍に収められた批評・解説にあたっての引用文献、および付録として掲載されたほとんどの文章は、旧南ベトナムで出版されたものであり、焚書の運命にあった書物を、社会主義ベトナムの研究者が蒐集し参考に使っていたことが分かる。ちなみに、ドー・ライ・トゥイは、ハー・ミン・ドゥックとファン・ク・デの二人の名を挙げて、彼らは革命にとって初子初孫の批評家であり、「人文」事件の後、「大師」たちが去った大学の穴埋めとして昇り上がってきた世代と説明し、二人が長年に亘って二頭立て馬車のように並走し、こちらは平韻あちらは仄韻といった並列関係にあったことを指摘し、このペアは、総合大学（現ハノイ国家大学・人文社会科学大学）言語文学部のトップ教師でもあり、二人による文学の見解のほとんどが、国の文学関係職員として毎年送り出されてきた学生たちによって、一途に社会に届けられてきたと解説している[Trần Hải Yến 2009: 67]。こうして彼らの自力文団評価が、学校教育で普及されるベトナム文学史の一部に組み込まれ、その後再生産され続けた。

1991年12月のソヴィエト連邦崩壊を経た1995年、「ベトナムロマン主義文学評価における問題と文学研究思考の刷新（Vấn đề đánh giá văn học lãng mạn Việt Nam và sự đổi mới tư duy nghiên cứu văn học）」を論じた論考が出され、2年後に自力文団の小説を論じた書籍に収められた。このことから、「ロマン主義文学＝自力文団の小説」が公式として成立していることが認められるが、そこでは、南部では非難より称賛が多い一方で、北部では「有害」や「消極的」という修辭が用いられたとし、北部では政治の指標によって文学が測定されてきたこと、また「リアリズム」の概念が狭隘すぎたとの指摘がなされ、政治の人間と文学の人間が同一視されてきたことが示されている。また、ドイモイ後には、以前のような「文学研究の政治化」は「一面的であり極端」と批判され、1994年に再版された自力文団の小説に付された紹介文における、ハー・ミン・ドゥックおよびファン・ク・デ等の評価は、より適切で客観的な新たな評価となっているとの説明がなされている[Lê Thị Dục Tú 1997: 216-235]。

1997年、チュオン・トゥーは自らの死を2年後に控え、次のような反省の言葉を残している（出版は2013年）。1936年にフランスで人民戦線が勝利し、こちら側には民主戦線が存在し、ようやくマルクス主義等多くの本を読めるようになり、自力文団の階級性が目につくようになった。階級性だけを見て文学を評価することは、あまり正しいことではないが、その当時、私の頭にはその階級性の問題だけしか目に入らなかった。ロマン主義やブルジョアの問題は、マルクス主義によれば、植民地と資本主義の本国とでは異なってくる。なぜなら、植民地における資本主義階級は、あちらの国々のように発展していないからである。すべてが本国の圧制下にあったのであって、彼らも同様に圧制されていた。よってまさにロマン主義は闘争性を有していた。当時は、いかなるグループも自力文団の作家たちのように上手く書くことができな

かった。青年たちはひどく熱中し次々とそれに従った。革命に向けた青年たちの熱情が必要な時期であったにもかかわらず、自力文団がそれらを吸い上げてしまった。私はその状況を食い止めなければならないと考えた。それは私の闘争であって、何の悪意もなかった [Trương Tửu 2013: 1152–1153]。

1998年7月第8期5中総の決議で謳われた「ベトナム人および各少数民族の伝統文化の目録作成・蒐集・整理の早期実施」を受けてか [Báo điện tử Đảng Cộng sản Việt Nam 1998], 1999年には、文学院から重厚な撰集『自力文団文学 (Văn chương Tự lực văn đoàn)』が刊行されたが、各作品に付された批評は、新規のものではなく、これまでの使い古しがほとんどである。出版社の言葉には、「自力文団同様 1930–1945 年ロマン主義文学」との叙述が見られ、「ロマン主義文学＝自力文団小説」の公式が継承される一方、1939 年以前のカイ・フン等の一部の作品は、ロマン主義とリアリズム双方の要素が入り混じっているとの見解が示されている。

こうした自力文団の小説の復活の動きについて、ヴオン・チー・ニャン (Vương Trí Nhàn, 1942–) は皮肉とともに「まだ無名の頃、度重なる決然たる態度でもって業を成してきた著名な教師兼文学評論家が、今日再版されたばかりのこの文団の数冊の小説に、いかめしい序文を寄せている。彼らは自身の見解の変化を公衆の前に呈示する必要があるのか、それとも単に食べていくための要請なのか (昨日の断固たる態度もつまりはただ生計を立てるためのものだったのだ) は不明である。最終的に教授たちはニャット・リンとカイ・フンの隣に快く名を書き連ねた。これもこれらの作家たちにとっては名誉なことであろう！」と苦言を呈している [Vương Trí Nhàn 2000: 78]。

1998 年、ライ・グエン・アン (Lại Nguyên Ân, 1945–) は、自力文団の作家たちの作品は、もはや本屋で探しにくいものではなくなったが、大勢の人が「新しい詩」を探し求める一方、自力文団の小説のほとんどが学生・生徒用の参考書や補助読本であると解説し、かつて自力文団の小説に憧れを抱いた人々が、新たに印刷された本を読み返してみても、いまや味気なく感じるとし、カイ・フンやニャット・リン等自力文団の小説家たちは、(筆者注：リアリズム作家として位置づけられている) ヴー・チョン・フン (Vũ Trọng Phụng, 1912–39) の『幸運 (Số đỏ)』やナム・カオ (Nam Cao, 1915?–51) の『チー・フェオ (Chí Phèo)』に並ぶ水準の文学結晶体を創り上げることはできなかったとの見解を示している。その上で、自力文団のものではない傑作のなかに、一部自力文団が寄与していることに気付かなければ、それは不平等な評価となる、なぜなら自力文団が呈示した小説の新しい描き方に、当時のほぼすべてのフィクション作家は非常に強く濃く影響を受けているためとの評価を下している [Lại Nguyên Ân 1998: 211, 218]。

撰集が出された流れに乗ってか、2000 年に自力文団関連の文章を集めた『民族文学の発展過程における自力文団 (Tự lực văn đoàn trong tiến trình văn học dân tộc)』および『カイ・フン——自力文団の優れた小説家 (Khái Hưng - Nhà tiểu thuyết xuất sắc của Tự lực văn đoàn)』が刊行さ

れたが、その大半は、1930年代に遡った南北双方の既刊の文章である。一方、2004年の『新版文学辞典 (Từ điển văn học: bộ mới)』では、『蕭山壮士』の壮士たちの敗戦は多かれ少なかれ、フランスに抵抗して戦ったベトナム国民党の片道の夢とロマンであると解釈された。2006年には、自力文団記念館を設立すべきとの意見が学術誌に掲載され [Nghiên cứu Văn học 2006: 127–131]、同年、博士論文を元にした『カイ・フン小説の論考 (Bàn về tiểu thuyết của Khải Hưng)』が刊行されたが、扱われた小説は他の多くの評論と同様『不安』 (= 『清徳』) までで止まっている [Ngô Văn Thư 2006]。同じく2006年、ヴォン・チー・ニャンは、「カイ・フンの文章を読み、彼の散文内の人物たちに触れると、まず東西の頑なな区別がなく、ただ躍動する文化の実体があるとの感慨を抱きやすい。そこには人生における百万もの色と形があり、人間の核心は元来すべての精神活動による否応ない要求であり、そこには洗練さがあり、美がある。このことは作家カイ・フンの魂だけに限らず、戦前 (1945年以前) の我が国の散文作品の多くが向かった方向であった。文学とともに生き、彼はコンスタントに執筆し、ハズレの作品はひとつも存在せず、いずれの文体であれ成功をおさめている。ベトナム語を使用し馴致させ、同時に現代化させた彼の貢献を見ただけでも、20世紀前半の優れた文学作家の一員に組み入れるのに十分である」と評価している [Vương Trí Nhàn 2006: 75, 79]。

2008年に、ニャット・リンの故郷カム・ザン (Cẩm Giàng) においてシンポジウムが開催され、グエン・フエ・チ (Nguyễn Huệ Chi, 1938–) は、(自力文団の) 誕生は、自由への希求そしてその渴望を自ら実現していく一項目として、さながら欠くことのできぬ内在的要請のように、国全体の文学創作活動に刺激的作用を及ぼしたとし、自力文団の芸術世界へ潜り込むことは、批判的リアリズムの作家たちの世界へのそれとは相異なり、一方はそのなかで自らが体験することを強いる世界であり、もう一方は自ら憤怒し告発する世界ではあるが自身との関連性は特に必要ではないとその違いを描写した。なお、ニャット・リン、カイ・フン、タック・ラム (Thạch Lam, 1910–42) ……の作品の頁をめくるたびに、人は自らに「我」自身との公正な対峙を強いられ、それについて黙考し尋問を行う、即ち自身の内なる深淵の世界を見つめることを強いられるのではなかろうかと叙述している。また、自力文団の風刺・諧謔・揶揄の傾向について、笑いのミラクルは、僕が貴殿と化し、貴殿が僕と化すように、一瞬で社会的地位を転倒させるとし、自らの笑い声でもって、自力文団は封建主義と植民地主義のカリスマたちを巧妙に扱き下ろし、苦しむ衆生たちと同じ地点にまで各位を引き下げたと評し [Nguyễn Huệ Chi 2009]、前出の「諧謔精神の度が過ぎる」との欠点に対する眼差しの転換を促す見解を呈示している。

2012年刊『ベトナム文学作品作家辞典 (Từ điển tác giả, tác phẩm văn học Việt Nam)』のカイ・フンの項目には、自力文団の代名詞であったロマン主義の文字が一つも見られず、かわりにリアリズムの文字が記されている点で、大きな転換がみられる。また、自力文団の盛衰はカイ・

フンのそれと結びついており、自力文団の強みと弱みにはカイ・フンのそれが反映されていると指摘されている。

2013年には、ベトナム北部および南部の双方で、自力文団設立80周年シンポジウムが開催され、双方において紀要（*Nhìn lại Thơ mới và văn xuôi Tự lực văn đoàn*）が出され、グエン・ダン・ミン（Nguyễn Đăng Mạnh, 1930–2018）は、これまでの文学状況を次のように解説している。（ドイモイ以前、自力文団と「新しい詩」は）教育プログラムに採用されないばかりか、社会全体にとっての禁書として扱われ、害毒さらには反動的文学としてみなされてきた。1980–90年代の文学に関する観念は依然として重苦しく、グエン・ダン・ミンが自力文団と「新しい詩」を高校教育のプログラムに入れたことは、保守派の人間に衝撃を与え、彼らは新プログラムに対する批判記事を新聞に掲載した。なお、グエン・ダン・ミンは、1930–45年におけるロマン主義文学に関する最も一般的な誤った観念として、ロマン主義文学と批判的リアリズム文学における階級的世界観の対立を挙げている。ロマン主義文学は資本主義世界観に属し消極的・反動的で、批判的リアリズム文学は貧しいプチブル階級の世界観を反映し労働者・人民および革命に近接しているとし、ロマン主義文学とは、奴隷の身の上にある人間を眠りに誘い幻想の夢へと連れていき、自然・宇宙・形而上的世界・個人主義を享受する恋愛へと逃避させ、革命の楽観主義的精神に相反する悲観思想やメランコリーの種を蒔く、革命にとっての弊害であり、それは読者を革命に背を向けさせ、1930年より示してきた党の革命の道から青年たちを脱線させるものとの説明を加えている。続けて、実際にはリアリズムの作家に組み込まれた文学者たちも、ロマン主義文学を描いていたことが指摘され、1930–45年においては、合法的な公定文学には、ロマン主義文学と批判的リアリズム文学、非合法文学には地下活動、即ち革命文学があり、ロマン主義作家と彼らの民は（概ね市民階級で主にブルジョア・プチブルの知識人）民族および民主主義の問題に対し非常に敏感であったのに対し、共産主義思想を呑み込むことは非常に難しく、彼らには、労働者階級・無産階級の人々が革命と革命リーダーの学説を理解できるとは到底信じることができなかったとの見解が示されている。そして、「新しい詩」・自力文団の小説およびその他のロマン主義作品（批判的リアリズム作品は含まず）は、確かに革命を教えることはなかったものの、自国において「故郷喪失」の屈辱感を知ることが手助けしてくれる。とすれば、革命に無害であるだけでなく、逆に革命に応ずる心構えを彼らに準備させることになるとの考察を行っている〔Trần Hữu Tá 2013: 12–16〕。同年、『カイ・フン——文学革新における異才な小説家（*Khái Hưng Nhà tiểu thuyết biệt tài trong công cuộc canh tân văn học*）』が出されたが、2000年と同様、そのほとんどが既刊の文章を集めたものとなっている。

2014年刊、文学理論家チャン・ディン・スー（Trần Đình Sử, 1940–）による論考には、自力文団やカイ・フンへの言及はないものの、彼らが排除された理由が忌憚なく叙述されている。チャン・ディン・スーによれば、八月革命以前、ベトナムは植民地主義下にあったが、多様な

学術探究グループが多く存在し多元的であった。ところが、1943年「ベトナム文化綱領」後から、文芸を^{プロパガンダ}宣伝として認めない者たちが批判され始め、その「批判」は真理探究への学術討論や論争ではなく、実質的に自分とは異なる考えを払拭し抹消するための闘争であった。そのため、通常、批判される側に言い返す権利はなく、意見を擁護する、意見を交換するといった権利を有さなかった。批判する側は、正義や主義を名目に、民衆を名目に、さらには革命を名目に、政治や思想・生き方に対する危険思想という名の罪をこれでもかというほどなすりつけた。こうした空気のなか、厄介事を避けるため、別の新たな学説や思想を創造しようとする者は誰もいなくなった。当時は正統思想以外のいかなる思想を抱くことは望まれず、専ら「さらなる協議」、「拡大」、「より明確な呈示」、「具体化」への道、つまりその正統思想を描写する道があるだけだった。ドイモイに至るまで私たちは高レベルな集中的締め付けの要請とともに、社会主義に進み行く民族・民主革命の条件下で形作られた、政治奉仕文学としての革命文学というたった一つの文学しか有さず、それは自らを宣伝の武器へと変身させていった。それは、テーマや主題、創作方法、世界観、生き方、さらには文体や形式までもを規定した。党性、新しい人間の描写、革命英雄主義、階級のモデル化が求められ、これらの観点が批評の指標となり、これに違反した場合には党の文芸路線から逸れているとみなされ、周縁の文学作品は追放された。個人が存在する空間等はないという集団主義を謳う無産階級イデオロギーへ移行し、個人主義および一個人は、無産階級にとって決して共存できぬ敵となった。そのため、個人主義は悪者としての自己中心主義とみなされ、思想闘争における革命の標的となった。結果、国民のなかで独立した思考のできる一個人は抹殺されることになった [Trần Đình Sử 2014a: 302–338]。なお、チャン・デイン・スーは、近年の成果として、自力文団の小説の真の価値を再度認識し直した点等を挙げているが、普及度に関して言えば、これらの成果は今のところ大学や研究所の研究者といった少数の階層だけに限られていると指摘している [Trần Đình Sử 2014b]。

2016年、「ベトナムを理解する (Hiểu Việt Nam)」シリーズが刊行され、新たな視点が呈示された。そのいくつかを挙げると、「テーマや実在へのアプローチ法を考察すると、ヴァー・チョン・フンと自力文団との違いはほとんどみられない。しかし後世は常に何らかの理由にこじつけて過去に関する異なる解釈を施すものである。まず初めに認めなければならない点は、文学の発言行為における個人としての作者の地位を築き上げたことは、現代ベトナム文学に対する自力文団の極めて重要な功績である」[Đỗ Lai Thúy 2016: 86, 95]と評され、また、「カイ・フンの晩年はほとんど知られず、ほとんど分析されていない。一時期、サイゴンでこれらの作業が進められたが、十分とは言えない」[ibid.: 113]との指摘もなされた。ところが一方で、同年2016年、師範大学出版会より刊行された『ベトナム文学——20世紀初頭–1945年 (Văn học Việt Nam từ đầu thế kỉ XX đến 1945)』で紹介された主要参考文献の筆頭2冊には、「人文」事件以後の引き締めのなか文学研究界を牽引した、そのためか新たな評価を試みたところで過

去の論調を依然として引きずっているかのような、ハー・ミン・ドゥックおよびファン・ク・デの書籍が挙げられ、ここ数年で出現してきた新たな研究動向はまるで活かされていないようである。同様に、目次に目を向ければ、作家名で章分けがなされているなか、夭逝した、即ち政治活動に関わらなかったタック・ラム以外の、自力文団小説家の名はなく、「1932-1945年ロマン主義文学潮流概括」の章に一括りにされている点で、今後もこうした過去の評価が再生産されていくことが予見される。

2020年、同じく「ベトナムを理解する」シリーズから『現代の風化——20世紀初頭植民地ベトナムにおける自力文団 (*Phong hóa thời hiện đại - Tự Lực Văn Đoàn trong tình thế thuộc địa ở Việt Nam đầu thế kỷ 20*)』が刊行され、当時発行された雑誌・新聞原本から得た情報が散りばめられた、若者世代による各研究成果が掲載され、自力文団研究の新たな展望を示している[Đoàn Ánh Dương *et al.* 2020]。²⁸⁾

6. ベトナム国外

最後にベトナム国外でのカイ・フンの扱われ方についてであるが、まずアメリカで出されたベトナム語で書かれたものとして、1997年に、『21世紀 (*Thế kỷ 21*)』からカイ・フンの50回忌を記念した特集号が出され、同年『起行 (*Khởi hành*)』²⁹⁾でもカイ・フンの死を検証する特集が組まれている。同じく1997年、『呪詛』の編集・刊行を行ったグエン・タック・キエン (Nguyễn Thạch Kiên) が、二部からなるカイ・フン特集本を出し、処女作と最期の作品およびカイ・フンへの回想文等が掲載された。なお2020-21年にかけて、フランス在住のトゥイ・クエ (Thùy Khuê, 1944-) が精力的に自力文団を論じ、自身のウェブサイトにも文章を掲載している。

英語で書かれたものとして、フランス語から翻訳された1985年刊 *An Introduction to Vietnamese Literature* では、³⁰⁾『蕭山壮士』におけるカイ・フンの功績は、実話をピカレスク小説に織り込み、史実と虚構を融合させ、壮大かつ魅力的な作品に仕上げ、憎き政権を倒すためにすべてを犠牲にする英雄たちの勇敢な行動、そしてファム・タイ (Phạm Thái) とクイン・ニュー (Quỳnh Như) の魅惑的な愛の物語を通して、サスペンスの手法を用いて読者を惹きつけたとされた。また、1935年のフランス人民戦線の台頭により、カイ・フンはロマン主義からリアリズムへと向かったと述べられ、彼は20世紀前半における最も偉大な小説家の一人であり、彼の功績は、真の国民文学を形成し、ベトナム語を国際的な文学言語の地位に引き上げたことであると評価

28) なお、ニ・リン (Nhị Linh) というカイ・フンのペンネームを使って文学ブログを書いている人物は、希少資料を元にカイ・フンに関する叙述をしている (<https://nhilinhblog.blogspot.com/search/label/khai-hung>)。

29) 発行人は、サイゴン時代の文芸誌『時集』と同じ人物である。

30) (仏語版) Maurice M. Durand; and Nguyen Tran-Huan. 1969. *Introduction à la Littérature Vietnamienne*. Paris: G.P. Maisonneuve et Larose.

されている [Durand and Nguyen Tran Huan 1985: 187–189]。1991 年の *Vietnam's Social and Political Development as Seen through the Modern Novel* では 6 頁を費やして、1945 年頃までのカイ・フンの小説のごく簡単な紹介がされている [Hoang Ngoc Thanh 1991: 132–138]。

近年の動向としては、2013 年に、南カリフォルニアで開催された自力文団シンポジウムのベトナム語の紀要が出されている [Phạm Phú Minh 2014]。また、2017 年に刊行された *Post-Mandarin: Masculinity and Aesthetic Modernity in Colonial Vietnam* では、カイ・フンの『春半ば』を題材に、植民地期ベトナムの女性と言語について論じられ [Tran 2017]、さらに、2021 年の *On Our Own Strength: The Self-Reliant Literary Group and Cosmopolitan Nationalism in Late Colonial Vietnam* は、1932–41 年までを対象とした自力文団の社会・政治活動を論じた本格的な研究書となっている [Nguyen 2021]。こうした海外の若い世代が進める研究動向がベトナム国内外に与える影響も今後見られていくことであろう。

IV おわりに

本稿は、単純化した図式で物事を分析することを問題視し、「カイ・フン（自力文団の小説執筆者）＝ロマン主義小説＝ブルジョワジー＝頹廃＝反動」の公式の解体を試みるものであったが、この公式の成立には、抗仏・抗米戦争、および冷戦を背景とした、換言すれば戦争に翻弄させられた国家の方針が関係していることが見えてきた。チャン・デイン・スーは、抗仏戦争および抗米戦争の只中であって、我ら／敵の間に明確な境界線を引くことが求められ、それは、筆を握る敵、思想上の敵に対しても同様だったと述懐しているが [Trần Đình Sử 2014a: 305]、そのためには、共産側についた作家はリアリズム、そうでない者はロマン主義といった単純な二分法に当て嵌めることが手っ取り早く、よって社会主義リアリズムが確立されていくにつれ、カイ・フンのリアリズム性は否定されていった。ベトナム文学史におけるロマン主義／リアリズムの境界線は、文学テキストに向き合った結果としてではなく、作家たちがどちらの陣営についたかが基準となって引かれた線であったと言えるだろう。³¹⁾ ところが、実際のカイ・フンの文学および思想は、そうした二分法に真摯に抗うものであり、³²⁾ カイ・フンは、いわば国共のあいだを取り持つことができた稀有な人間でもあった。ゆえに、不気味な存在として畏れられた可能性もある。

なお、ベトナム国内においても、これまで国家権力ががつくりあげたその公式をときほぐす試みが幾度かされてきたことを確認することができた。しかし、同時に、たとえそうした努力に

31) 同様に、冒頭で紹介した現代における自力文団の小説家と詩人との認知度の差は、共産党ではない政党に関わったか否かに依拠しているものと思われる。

32) これについては、田中 [2022] を参照いただきたい。

よってところどころ見直しの動きがみられても、時代時代の政治状況に巻き込まれ振り出しに戻ったり、また、直近の研究動向に関心を払わない一部の教育従事者たちの保守的態度により、結果、「カイ・フン＝ロマン主義」といった公式が再生産され続けたりする状況も見えてきた。

ベトナム国内の文学批評を牽引する知識人たちは、ソヴィエト連邦の崩壊を経て、高齢になるにつれ、保身の構えがゆるんでいくのか、これまでの国による文化政策（当然批評者も巻き込まれていた）を、客観視し批判的に見る姿勢を露わにしはじめている。一方で、そうした姿勢を批判する保守派も健在であり、なかなか新たな知見が世に行き渡らないといった面もあるだろう。また、再評価の動きを見ても、作品の再版の数に対して、文学テキストに向き合った学術研究の少なさが目につく。こうした傾向は、「独立した思考のできる一個人は抹殺」されてきた過去のトラウマが影響しているのだろうか。

本稿で露わになった複雑性は、カイ・フン研究や文学研究においてだけでなく、いかなる研究領域にも潜んでいるものと考えられる。ドー・ライ・トゥイが言うように、こうした複雑性を見て見ぬ振りをしていたのでは、ベトナムを真に理解することはできないということであろう。

謝 辞

本稿で参照した文献の一部は、2017年度TUFS Joint Education Program、2018年度日本学術振興会若手研究者海外挑戦プログラム、2021年度京都大学東南アジア地域研究研究所IPCR「東南アジア研究の国際共同研究拠点」、2021年度松下幸之助記念志財団研究助成の助成を受けて収集したものです。

参 考 文 献

日本語

- 今井昭夫. 2002. 「ドイモイ下のベトナムにおける包括的文化政策の形成と展開」『東京外国語大学論集』64: 89-107.
- 川口健一. 1987. 「ベトナム近代文学の展開 (I) 小説」『東京外国語大学論集』37: 175-189.
- 栗原浩英. 1988. 「ベトナム労働党の文芸政策転換過程 (1956年～58年) ——社会主義化の中の作家・知識人」『アジア・アフリカ言語文化研究』36: 1-26.
- 中里見 敬. 2003. 「中国近代文学における浪漫主義の言説——ポストコロニアル文化論・翻訳論の視覚から」『言語文化論究』18: 89-109.
- 竹内與之助. 1966. 「Tự-Lực Văn-Đoàn (自力文団) とその背景」『東京外国語大学論集』13: 77-93.
- 田中あき. 2021. 「自力文団カイ・フン著『清 徳』——フランス植民地の獄中で書かれたベトナム語小説を積極的に読む」『東南アジア——歴史と文化』50: 24-43.
- . 2022. 「1940年代ベトナム北部で描かれた植民地主義と植民者の表象——ベトナム語作家カイ・フンのテキストを中心に」『言語・地域文化研究』28: 1-20.
- オーウェル, ジョージ. 2021. 『全体主義の誘惑——オーウェル評論選』照屋佳男 (訳). 東京: 中央公論新社.

外国語 (NXB は Nhà xuất bản の略)

- Đoàn Quốc Sỹ. 1960. *Tự lực văn đoàn*. Sài Gòn: NXB Hồng Hà.
- Dương Nghiễm Mậu et al. 1972. *Khái Hưng - thân thế và tác phẩm*. Sài Gòn: Nam Hà.
- Durand, Maurice M.; and Nguyen Tran Huan. 1985. *An Introduction to Vietnamese Literature*. New York: Columbia

- University Press.
- Duy Thanh; Mai Thảo; Ngọc Dũng; Nguyễn Sỹ Tế; Thanh Tâm Tuyền; Thái Tuấn; Tô Thùy Yên; and Trần Thanh Hiệp. 1960. Nhìn lại văn nghệ tiền chiến ở Việt Nam. *Sáng tạo* 4: 1–16.
- Đảng Cộng sản Việt Nam. 2002. *Văn kiện Đảng toàn tập - tập I 1924–1930*. Hà Nội: NXB Chính trị Quốc gia.
- Đỗ Lai Thúy, ed. 2016. *Những cạnh khía của Lịch sử Văn học*. Hà Nội: NXB Hội Nhà văn.
- Đỗ Mười. 2007. *Những bài nói và viết chọn lọc - tập II*. Hà Nội: NXB Chính trị Quốc gia.
- Đoàn Ánh Dương et al. 2020. *Phong hóa thời hiện đại - Tự Lực Văn Đoàn trong tình thế thuộc địa ở Việt Nam đầu thế kỷ 20*. Hà Nội: NXB Hội nhà văn.
- Hoang Ngọc Thanh. 1991. *Vietnam's Social and Political Development as Seen through the Modern Novel*. New York: Peter Lang.
- Khái Hưng. 1939. Câu chuyện hằng tuần. *Ngày Nay*: No. 156. 1939/4/8.
- . 1946. Dưới Ánh Trăng. *Chính Nghĩa*: No. 10. 1946/8/5.
- . 1988. *Nửa chừng xuân*. Hà Nội: NXB Đại học và giáo dục chuyên nghiệp.
- Lại Nguyên Ân. 1998. *Đọc lại người trước, đọc lại người xưa*. Hà Nội: NXB Hội Nhà văn.
- Lê Hữu Mục. 1958. *Khảo luận về Khái Hưng*. Sài Gòn: Trường thi Phát hành.
- Lê Thị Dục Tú. 1997. *Quan niệm về con người trong tiểu thuyết Tự lực văn đoàn*. Hà Nội: NXB Khoa học Xã hội.
- Mai Hương, ed. 2000. *Tự lực văn đoàn - trong tiến trình văn học dân tộc*. Hà Nội: NXB Văn hóa - Thông tin.
- Ngô Văn Thư. 2006. *Bàn về tiểu thuyết của Khái Hưng*. Hà Nội: NXB Thế giới.
- Nguyen, Martina T. 2021. *On Our Own Strength: The Self-Reliant Literary Group and Cosmopolitan Nationalism in Late Colonial Vietnam*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Nguyễn Đức Dân. 1958. Mấy ý kiến về Nhất Linh và Khái Hưng - Hai nhà văn tiêu biểu trong Tự lực văn đoàn. *Văn Sử Địa* 46: 8–28.
- Nguyễn Thạch Kiên, ed. 1997. *Khái Hưng - Kỷ vật đầu tay và cuối cùng - Tập I*. California: Phương Hoàng.
- , ed. 1998. *Khái Hưng - Kỷ vật đầu tay và cuối cùng - Tập II*. California: Phương Hoàng.
- Nguyễn Trác; and Đái Xuân Ninh. 1989. *Về Tự lực văn đoàn*. TP.HCM: NXB TP.HCM.
- Nguyễn Tường Bách. 1981. *Việt Nam những ngày lịch sử*. Montréal: Nhóm Nghiên cứu Sử địa.
- Nguyễn Văn Linh. 2011. *Nguyễn Văn Linh tuyển tập II (1986–1998)*. Hà Nội: NXB Chính trị Quốc gia - Sự thật.
- Nguyễn Vũ. 1969. *Văn thi sĩ tiền chiến*. Sài Gòn: Nhà sách Khai trí.
- Phạm Phú Minh, ed. 2014. *Triển lãm và hội thảo về báo Phong hóa Ngày nay và Tự lực văn đoàn*. California: Người Việt xuất bản.
- Phạm Thế Ngũ. n.d. (1961?) *Việt Nam văn học sử giản ước tân biên - tập 3*. California: Đại Nam.
- Phạm Việt Tuyền. 1953. *Nghệ thuật viết văn*. Hà Nội: NXB Thế giới.
- Phan Cự Đê. 1957. Góp ý kiến về việc tái bản *Tiểu son trang sĩ*. *Hà Nội hàng ngày*: No. 675. 1957/6/12.
- . 1990. *Tự lực văn đoàn - con người và văn chương*. Hà Nội: NXB Văn Học.
- . 1999. *Văn học lãng mạn Việt Nam (1930–1945)*. Hà Nội: NXB Giáo dục.
- Phong Lê. 2010. *Hai mươi nhà văn, nhà văn hóa Việt thế kỷ XX*. Huế: NXB Thuận Hóa.
- , ed. 1986. *Văn học Việt Nam kháng chiến chống Pháp (1945–1954)*. Ủy ban Khoa học xã hội Việt Nam - Viện Văn Học. Hà Nội: NXB Khoa học Xã hội.
- Phương Ngân, ed. 2000. *Khái Hưng - Nhà tiểu thuyết xuất sắc của Tự lực văn đoàn*. Hà Nội: NXB Văn hóa thông tin.
- Thanh Lăng. 1967. *Bảng Lược Đồ Văn Học Việt Nam - Quyển Hạ - Ba thế hệ của nền văn học mới (1862–1945)*. Sài Gòn: Trình Bày.
- Thanh Tùng. 1973. *Văn học từ điển*. Sài Gòn: Nhà sách Khai trí.
- Thế Phong. 1974. *Lược sử văn nghệ Việt Nam nhà văn tiền chiến 1930–1945*. Sài Gòn: Vàng Son xuất bản.
- Thư Trung. 1964. Khái Hưng, thân thể và tác phẩm. *Văn* 22: 3–16.
- Tran, Ben. 2017. *Post-Mandarin: Masculinity and Aesthetic Modernity in Colonial Vietnam*. New York: Fordham University Press.
- Trần Đăng Suyền, ed. 2016. *Văn học Việt Nam từ đầu thế kỷ XX đến 1945*. Hà Nội: NXB Đại học Sư phạm.
- Trần Đình Sử. 2014a. *Trên đường biên của lý luận văn học*. Hà Nội: NXB Văn học.
- Trần Hải Yến, ed. 2009. *Nghiên cứu văn học Việt Nam những khả năng và thách thức*. Hà Nội: NXB Thế giới.
- Trần Hữu Tá, ed. 2013. *Nhìn lại Thơ mới và Văn xuôi Tự lực văn đoàn*. TP.HCM: NXB Thanh niên.
- Trần Khánh Triệu. 1997. Papa tòa báo. *Thế kỷ 21* 104: 13–21.
- Trương Chính. 1939. *Dưới mắt tôi*. Hà Nội: Nhà in Thụy Ký.

- . 1979. *Hương hoa đất nước*. Hà Nội: NXB Văn học.
- Trường Chinh. 1997. *Tuyển tập Văn học tập I*. Hà Nội: NXB Văn học.
- Trương Tửu. 1935. Văn học Việt Nam hiện đại chung quanh một tấn kịch của thời đại. *Loa*: No.78. 1935/8/15.
- . 1956. Bệnh sùng bái cá nhân trong giới lãnh đạo văn nghệ. *Giai phẩm mùa Thu* Tập II: 3–14.
- . 2013. *Tuyển tập Nghiên cứu Văn hóa*. Hà Nội: NXB Văn học - Trung tâm Văn hóa Ngôn ngữ Đông Tây.
- Viện Văn học. 1999. *Văn chương Tự lực văn đoàn - Tập I*. Hà Nội: NXB Giáo dục.
- Vũ Đức Phúc. 1971. *Bàn về những cuộc đấu tranh tư tưởng trong lịch sử văn học Việt Nam hiện đại (1930–1945)*. Hà Nội: NXB Khoa học xã hội.
- Vũ Hân. 1967. *Văn học Việt Nam thế kỷ XIX tiền bán thế kỷ XX 1800-1945*. Sài Gòn: Nhà sách Khai trí.
- Vũ Ngọc Phan. 1945. Văn học Việt Nam từ sau cuộc Âu chiến vừa qua. *Ngày Nay Kỷ Nguyên Mới*: No. 14. 1945/8/4.
- . 2010. *Vũ Ngọc Phan Toàn tập - tập II*. Hà Nội: NXB Văn học.
- Vương Trí Nhàn. 2000. *Buồn vui đời viết*. Hà Nội: NXB Hội Nhà văn.
- . 2006. *Cánh bướm và đóa hướng dương*. Hà Nội: NXB Phụ nữ.
- , ed. 2004. *Truyện ngắn Khái Hưng*. Hà Nội: NXB Hội Nhà văn.

Đề cương về Văn hóa Việt Nam - Chặng đường 60 năm. 2004. Hà Nội: NXB Chính trị Quốc gia.

Truyện ngắn Khái Hưng. 1972. Sài Gòn: NXB Văn nghệ.

Từ điển văn học: tập I. 1983. Hà Nội: NXB Khoa học xã hội.

新聞・文芸誌

- Khởi hành*. 1997. No. 163. California.
- Ngày Nay*. 1937. No. 90. Hà Nội.
- Nghiên cứu Văn học*. 2006. No. 3. Hà Nội.
- Phổ thông*. 1959. No. 19. Sài Gòn.
- Thế kỷ 21*. 1997. No. 104. California.
- Thời tập*. 1974. #5 4. Sài Gòn.
- Văn hóa Ngày Nay*. 1958–59. Sài Gòn.

オンライン資料（最終アクセスはすべて 2022/4/1）

- Báo điện tử Đảng Cộng sản Việt Nam, Nghị quyết số 03-NQ/TW, ngày 16/7/1998, của Ban Chấp hành Trung ương tại Hội nghị Trung ương 5 (khóa VIII) về Xây dựng và phát triển nền văn hóa Việt Nam tiên tiến, đậm đà bản sắc dân tộc. <https://tulieuvankien.dangcongsan.vn/he-thong-van-ban/van-ban-cua-dang/ngphi-quyet-so-03-nqtw-ngay-1671998-cua-ban-chap-hanh-trung-uong-tai-hoi-nghi-trung-uong-5-khoa-viii-ve-xay-dung-va-phan-1692>.
- Nguyễn Hiến Lê. 2015. *Hồi ký Nguyễn Hiến Lê*. https://isach.info/story.php?story=hoi_ki_nguyen_hien_le_nguyen_hien_le&chapter=0031.
- Nguyễn Huệ Chi. 2009. Thử định vị Tự lực văn đoàn. <http://www.vanhoanghean.com.vn/k2-categories/goc-nhin-van-hoa/nhung-goc-nhin-van-hoa/177-thu-dinh-vi-tu-luc-van-doan>.
- Nhị Linh. <https://nhilinhblog.blogspot.com/search/label/khai-hung>.
- Thụy Khuê. <http://thuykhue.free.fr/index.html>.
- Trần Đình Sử. 2014b. Lý luận văn học Việt Nam hiện đại trong bối cảnh toàn cầu hóa - triển vọng và thách thức. <https://trandinhhu.wordpress.com/2014/05/13/li-luan-van-hoc-viet-nam-hien-dai-trong-boi-can-toan-cau-hoa-trien-vong-va-thach-thuc/>.

(2022 年 11 月 25 日 掲載決定)